船井情報科学振興財団奨学生レポート/第三回

2020 年 6 月

Department of Economics, Princeton University　山岸　敦

1 年目のコースワークは無事に突破することができ、プリンストン大学の Ph.D.課程 2 年生になりかけの山岸です。財団のご支援に改めて感謝申し上げます。

さてもう皆さまご存じの通り、2020 年に入ってから始まったコロナウイルスの流行によりどこの社会も非常に混乱した状況になっています。もちろん健康あっての学問ですので自分の生活面には気を配って過ごしているのですが、それと同時に経済学者（の端くれ）の１人として、この疫病の流行が社会にどのような影響を与えるのか、あるいは与えないのか、考えてしまうときもあります。これは僕だけの話ではなく、他の経済学者も同様で、経済学研究の世界でもかなりの動きがありました。

コロナ研究の経済学界における大流行？

経済学界のコロナに対する動きは非常に敏感なものでした。マクロ経済学者を中心に様々な分野の経済学者がコロナ流行に関連する研究を開始し、理論研究、データ分析ともに即製の研究が次々と発表されています。「COVID Economics」なる雑誌まで創刊され、コロナに関する経済学論文が（ふだんの経済学ののんびりした出版速度からは考えられないような速度で）多数発表されています。[1]　それ以外にも、例えば Journal of Public Economics, Journal of Urban Economics といった私の分野を代表する伝統と権威ある雑誌がコロナに関する研究を優先して扱う旨を発表しています。

もちろん、こうした研究には意味があると思います。コロナウイルスに関連する経済的な影響がどの程度になるのかは未確定ではありますが、相当のダメージが予想されています。現在または近い将来、どのような政策を考えればその傷口を最小限に抑えることができるのか、その手がかりを提供することには確実に社会的意義があると考えています。

その一方で（もちろん質の良い論文もあると思いますが）、批判的に見るのであれば玉石混合の論文が量産されている面もあります。現在進行形のウイルスに対応するため論文の速報性が重視され、分析を煮詰める余裕が必ずしもないのです。科学論文が玉石混合なのは普段からある意味そうなのですが、医学的なウイルスの性質すらまだまだ未解明の状況でありながらいつも以上に速報性が重視され、論文の質を担保する仕組みが整わないままえいやっと様々な論文が公開されていて、いつも以上に「良い論文」が粗悪な論文の中に埋もれてしまっている気がしています。

この状況をどう考えれば良いのでしょうか？僕個人としては現時点では何とも言えませんが、世に出ている、これから出てくる経済学論文が少しでも良い政策運営を可能にし、ウイルスによる影響を小さくすることに貢献することを願っています。間違っても、正しくない論文が粗製乱造の結果生まれ、それによって政策が誤った方向に影響されてしまい、社会に余計にダメージを与えてしまう事態は避けるべきです。論文の生産者である学者、消費者である政策担当者の両者とも、ぜひ細心の注意を払って頂きたいと思っています。

---

[1] https://cepr.org/content/covid-economics-vetted-and-real-time-papers-0

じゃあ、山岸はコロナ研究するの？

僕個人としては、（悩んだのですが、）今すぐコロナウイルスに直接関連する速報性の高い研究をするのはやめておこうと思っています。理由はいくつかあって、まず第１にもうすでに非常に多くの学者がコロナ研究を相当やっているということがあります。僕は基本的にあまのじゃくなので、「みんなやってるなら、わざわざ自分がやらなくても別にいいかな…」と思ってしまう次第です。第２に、経済学研究というフォーマットでやる必要性を個人的には必ずしも感じないということです。例えば、速報性が高くて示唆に富む議論を展開するのであれば、経済学の専門誌でなく The Economist のようなもう少し緩めの媒体での論説をするという手もある気がしています。その方が多くの方の目に触れ、他分野の研究者、政策担当者やその他さまざまな方に読んでもらえるので有益な面もあるのではと思います。

研究の対象としてはもう少し先の未来に、このコロナという伝染病によってこれからの社会がどういう方向に動くかということにはとても興味があります。ジャドレ・ダイヤモンドの「銃・病原菌・鉄」にあるように、歴史的に疫病はしばしば社会に多大な変質をもたらしてきました。今回のコロナウイルスはどういう経済、社会的影響を与えうるのでしょうか？身近なところで言えば、テレワークの普及が予想されます。例えばこれにより通勤の重要性が減少するとすれば、わざわざ東京のど真ん中に住んで高い家賃を払わなくて済むようになるかもしれません。ではみんながこう考え始めたとしたら東京という都市の構造にどんな影響が生まれるのか…これはまさに、都市経済学の古典的な課題（の現代版）が重要になる局面です。もちろんテレワークよりもっと大きいスケールであれば、外交関係や人種差別の問題など、様々な問題が噴出するかもしれません。

現代社会において疫病の流行が大きなリスクになることをビルゲイツ氏が 2015 年に指摘していたことが話題になりました。[2] もちろんこの着眼点は鋭かったということになるわけですが、同時に社会についてずっと考えている者（の端くれ）として、自分はどうして疫病の流行に注目するに至らなかったのか悔しい気持ちもあります。起こったことを後追いで研究するのは間違いなく重要ですが、それだけでなく少し先を見据えて考えてこの先の社会がどうなっていくのか、考えられるようになりたいなと思っています。

じゃあ、山岸は今なんの研究してるの？

今までの継続の研究と、新しい研究の 2 つを進めています。今までの研究だと、まず香川大の福村さんとの共同研究である「Minimum Wage Competition」が International Tax and Public Finance という雑誌に無事に掲載されました。掲載後、たまたま密接な関連テーマで論文を書いていたミシガン大の学生と連絡を取る機会があったのですが、彼にもこの論文はしっかり認知してもらっていました。最低賃金についてはもう一つ単著の未公刊論文があるのですが、こちらも少しずつほかの人に引用してもらえることが増えてきました。レストランの経営者は自分の作った料理が美味しかったとのレビューがあれば嬉しくやりがいを感じるものだと思いますが、僕は料理ではなく論文を製造しているというだけで、まさにそういう心境です。論文、がんばって書いて良かったなあと思えます。

もう一つ既存の研究についての朗報があり、東京理科大の岸下さんとの共著論文「Contagion of

[2] https://www.ted.com/talks/bill_gates_the_next_outbreak_we_re_not_ready/transcript?language=ja

Populist Extremism」が Journal of Public Economics という雑誌から改訂要求を受けました。この雑誌は僕の専門の１つである公共経済学の分野では最も権威ある雑誌で、ここに論文を載せることは留学する前から目標の１つでした。残念ながら改訂要求の内容はきつく確実に載るという状況にはないのですが、それでも掲載に肉薄していることは事実です。なんとかもうひと踏ん張りして掲載まで持っていこうと思っています。

次に、新規の研究についてですが、共同研究プロジェクトが 2 件水面下で進行しています。どちらもまだ初期段階でどうなるのかは不明ですが、良い報告ができることを目指して鋭意努力しています。これとは別に、自分でも研究アイデアをいくつか考えています。こちらもより良い具体的なアイデアに昇華できることを目指しています。

これは自分の研究ではないのですが夏休みの間は Stephen Redding 教授の研究補佐の仕事も引き受けています。彼は都市地域経済の分野で近年非常に影響力のある研究をしていて、学ぶところが多いだろうと思っています。近い将来彼のようにインパクトのある研究が出来るようになりたいと願っています。

最後に、「趣味の研究」について進展があったのでお知らせします。前回のレポートで世間からの評価とは関係なく自分が重要だ、面白いと思うからやる研究を「趣味の研究」と呼んで、そういう研究も細々やっていきたいということを書いていました。今回さっそく進展があり、「School Bullying Increases Support for Redistribution in Adulthood」と題して、短い論文をオンライン上で公開しました。[3]タイトルの通り、学校でいじめを受けることで再分配政策（税金などを用いて、貧困層にお金が渡るようにする政策）を支持する可能性が５-７％ほど高まることを日本のアンケートデータを用いて示した研究で、いじめが将来の政治的選好に大きな影響を与える可能性を統計的に示した世界初の研究だと思います。あくまで「趣味の研究」ではありますが、個人的には重要な結果だと思っており、経済学の雑誌に限らず様々な雑誌を視野に入れつつ、ぜひ出版してより広く世に問いたいと思っています。

末筆になり恐縮ですが、船井財団の皆様のご支援のお陰でこの混乱した情勢の中でも安定した留学生活を送らせて頂いていることに改めて感謝申し上げます。今後とも精進いたします。

[3]僕の個人 HP から最新版をダウンロードできます：
https://sites.google.com/site/econyamagishi/research